＝博士論文紹介＝

佐藤元紀　著

『中原中也初期詩篇研究―1930年前後までの詩的ポリティクス―』

《論文構成》

序論

　第一章　中原中也初期詩篇を問う意義

　第二章　大岡昇平「中原中也伝」論

本論

第Ⅰ部　「ノート1924」とその時代

　第一章　「ダダイスト」が恋を歌うこと

　第二章　揺らぐ私とその行方

　第三章　「認識以前に書かれた詩」から〈詩〉へ

第Ⅱ部　「白痴群」創刊前後

　第一章　〈文語定型詩〉という戦略

　第二章　「白痴」たちの「夢」

第Ⅲ部　『山羊の歌』成立に向けて

　第一章　中原中也「春の夜」とヴェルレーヌ「白き月かげ」

　第二章　中原中也「修羅街輓歌」と「精神」の探求

結論

　中原中也を詩史から切り外し、固定的詩人像を形作ってきた従来の研究に対して、著者は中也の初期詩編を大正末から昭和初期の史的展望の中で検討することを試みている。著者はまず、戦前の四季派によって形成された〈和製ランボー〉のイメージと、戦後展開される大岡昇平の近代的自我の問題の中で、中也の虚像が形成されていくプロセスを明らかにする。

　こうした詩人像の枠から逃れ、中也文学の生成過程を探るために、第Ⅰ部では、習作期の「ノート1924」に収められた詩編を取り上げ論じている。各詩編は、関東大震災以後、急速な価値観の崩壊と認識論の転換の中で展開されたダダの運動や、ベルクソンの〈純粋持続〉、西田幾多郎の〈認識以前〉の理論とそれぞれ接点を有し、この傾向が、認識で捉えられない形而上へ傾倒していく中也文学の一面を示唆しているとする。

　ただし、前述の問題意識は、無意識の意識化というアポリアを孕み、第Ⅱ部において、そのアポリアを解消するために行われた法論の内実が検討される。その方法の一つは、〈内在律〉への執着から歌うべき「夢」を喪失した口語自由詩を否定し、文語定型詩の形式を借りる試みであり、もう一つは、歌曲の形式に接近する方法であるとする。著者は、ベートーヴェンの〈絶対音楽〉の概念が焦点化される文壇の相貌を精緻に考察し、示唆に富む論を展開していく。ただし、音楽を借りる方法においても、言語表現以前に存在する「夢」を言語化するという難題は解消されず、中也は「夢」を感じ取る「心」の問題に着目することになるという。

　第Ⅲ部では、「夢」をめぐる中也の認識がフランス象徴主義と呼応している事実が検証される。著者はまず、意識と無意識の境界で歌われた「春の夜」の方法が、ヴェルレーヌの「陶酔」の方法と類似している点に着目している。さらに、かかる無意識の接近は、フランス象徴主義に触れ、「精神」の探求を課題としていた若い世代、とりわけ辰野隆を中心とする東大仏文グループの中で共有されていた事実が述べられる。そして、「夢」を歌う詩という言語表現の限界を克服した詩編として「盲目の秋」を取り上げ論じている。

　著者の論文は、特定の枠の中で特権的に解釈されてきた中也詩編の相対化に成功していると同時に、各詩編を極めて複雑な言説が交差する当時の文壇の相貌の中で検討することで、中也文学の新たな位置づけの可能性を提示しているといえよう。

（姜惠彬）